生活

坪庭の点景

私の家の坪庭に数本の楓の木がある。その楓の木の一本に、足長蜂が巣を作った。二階の椅子からは手を伸ばせば届く距離である。若葉の頃に一匹の蜂が忙しそうに同じ場所を飛び回っていた。蜂は一匹だけで、私がそっと顔を近づけても恐れる様子はない。一週間ほど経った頃ようやく巣作りだと気づいた。それは一階の軒下にも別の二つの小さな巣が出来ていたからである。現在の家屋は密閉度がよく、スズメの巣作りも大変だと聞いたことがあるが、蜂もご多聞に漏れず住宅には苦労しているようである。私が子どもの頃は蜂の巣は材料が手に入り易い土蔵の近辺と相場が決まっていた。

早春の小庭は梅の花が終わると花らしい花はヤマボウシが咲くまで閑散とする。

花も密もない小さな庭にどうして蜂は巣を作るのだろうと不思議であった。しかし、よく考えて見れば私のベランダからは、借景には勿体ないようなニセアカシアの高木の並木が見える。これが一斉に花を咲かせると、突然、雪が降ったように白い山脈（やまなみ）に変わるのである。蜂たちにとっては食べきれないご馳走に違いない。初めのう

ちはぼんやりと眺めるだけであつたが、蜂は休みなく、何時(いつ)そこに目をやってもせっせと巣作りをしている。

やがて、ヤマボウシの咲いた頃に、丸味を帯びた巣の全体像が確認できるようになった。丸く見えた巣の内部は六角形の集合体で十個ほどある。蜂に限らず動物は子育ての時には攻撃的になるが、私は無用な殺生や悪戯をしないことにしているので、蜂も私向かって来たりはしない。日々膨らむように大きくなって行く巣は勤勉な一匹の蜂によって作られているようだ。個室の六角形は、私の数奇な青春を刻んだ夜間高校の校章の形でもあったのである。

ところが、ある日気が付くと巣に親蜂がいない。始めは蜜吸いか、巣の材料探しで姿が見えないのだと思っていた。それでも、二日、三日と経過すると心配は最悪の事態を考え始める。親蜂の不慮の事故である。私のお気に入りの散歩道で、時折、蜜蜂やスズメ蜂の死骸を見ていたからであった。蜂にもテリトリーがあり、死闘を繰り返すのである。足長蜂の寿命はどれほどなのか知らないが、永遠の繁栄に見える蜜蜂の寿命も女王蜂を除いて雌の寿命は約一ヶ月、雄は羽化すると間もなく死んでしまうとある本で読んだことがある。蜂の天敵は沢山いる。野鳥、蝙蝠(こうもり)、蜂同士、そして、何よりも恐し

いのは人間の自動車なのである。飛翔があまり得意でなく、蜜を求めて低く飛ぶ蜂の仲間の多くが犠牲になるのである。

人間は寒さや暑さに小言を云い、春秋の景に感動しながら、平均的に八十回も四季を迎える。すでに、秋の紅葉は過ぎ、楓は裸木(はだかぎ)を寒風に晒(さら)している。そこには、初夏に残された小さな蜂の巣だけが、粛然と小枝の先に残っている。そして、その住人の居ない抜け殻が、命の継承の意味深さを私に語り続けている。

私の青春の詰まった蜂の巣の校章の学校は、今や、校舎も校名も校章も変わり、思い出の中にしかない。恩師も多くは鬼籍となり同級生の幾人かは既に亡くなった。これは生を受けた者の宿命として受け入れるしかないのだが、再び逢うことのない「さよなら」は寂しさを越えて空しくさえある。

同級生の多くの中には、政治家として名を成したり、地位や財産を成したりした者もいる。しかし、その多くは新聞や週刊誌で話題になることもなく、名前はおろか静かな呼吸さえも聞こえて来ない。一人一人にはきっと語り尽きないドラマがあったに違いないのだが、皆それぞれの立場で懸命に生き、現在も最善の道を選択し生きているに違いないのだ。苦難と幸運、喜びと悲哀、愛と憎しみ、さらに

相克に悩み、喜びに歓喜した翌日には悲嘆のどん底を這い回った日もあったかも知れない。

まだまだ人生を俯瞰できる年齢でもないが、「中庸」こそが大いなる幸せであることに最近気づいた。「中庸」は単なる「平凡」とは違う。平凡は怠惰に近い意味を持つが、中庸には主体として意思が含まれているからである。「未発の中」がそれである。「未発の中」とは、人は人生を過ごす中で、喜怒哀楽の感情が外界の刺激に触発されて起る。しかし、そのような感情の起る本来の心の根本を考えれば、それは万人に等しく賦与された「善」という本性である。それを「中」と呼び、これこそが事前に制御できる「未発の中」なのであると、孔子の孫の「子思（ししゝ）」が中庸という書（元々は「大学」の一部）に書き残している。奇しくもこれは古代ギリシャのアリストテレスの中心概念でもある。

一匹の蜂の死が思わぬ脱線をさせたが、現代人が忘れかけている「中節の和」（思節とは違う）を取り戻すには、このような一刺しも時に有効なのではあるまいか。かつて、蜂の一刺しで総理の職を棒に振った人もいたが、わたしの同級生たちは、世の中を賑わすことも、大それた話題を提供することも無く暮らしているところを見る

と、「中庸」を体して生き抜いているらしい。楓の木の親蜂の最期の様子は知らないが、巣のこどもたちを護るために、あるいは強敵と刺し違えたのかも知れない。

私は子どもの頃に何度も蜂の巣をいたずらして刺されているので、あの痛さと衝撃は忘れない。だから、私にだけは「中庸」という書物をなめたことに免じてお許し願いたい。